山口・吉南医師会女性医師部会合同研修会報告

佐々木映子

新年気分が少し残る１月25日㈯18時から亀山町のマリーゴールドに於いて、山口・吉南医師会女性医師部会の合同研修会が開催された。参加者は山口市医師会の男性医師２名、女性医師７名、吉南医師会の女性医師４名、講師の中原豊先生の合計14名。一月らしい和服の参加者もおられ、和やかな中にも清々しい雰囲気で始まった。

司会進行は田村博子先生。開会にあたり野瀬橘子部会長は、平成22年設立の女性医師部会も10年目を迎え今年は大事な節目の年であるが、これから若い世代にも引き継いでいけるよう時代に合った会にしていきたいとご挨拶された。淵上会長からは、この合同研修会は斎藤会長の時代から度々参加しており毎年楽しみにしているが、今後も参加したいとのご挨拶があった。そしていよいよ中原中也記念館館長　中原豊先生のご講演となった。

ミニレクチャー

「言葉に耳をすます―中原中也の詩と音楽」

講師：中原中也記念館　館長　中原　豊先生

中也の詩は音楽と関わりが深い。一般に詩と音楽が関わると言えば、詩に曲をつける、あるいは曲に合わせて詩を書く、というイメージだが、中也の場合は詩そのものに豊かな音楽性があるという。

言葉というと人はまずその意味を思い浮かべるが、文学の言葉ではイメージの比重が大きい。まず声（音）として耳に入り、音そのものの響きの持つイメージ、リズムの持つイメージ、そして最後に言葉の意味、という順でとらえられる。例えば「か行」のひらがな「か」、「が」はそれぞれＫ、Ｇで表記する子音であり、その違いである「濁点を打つかどうか」は、声においては「声帯を震わせているかどうか」の違いである。これを日本人は「澄んでいる」「濁っている」と表現し、音をイメージで敏感にとらえているのである。中也はそういった音そのもののイメージとリズムが豊富な人であった。

中也は音楽が好きで自分でもよく歌を歌っていた。「朝の歌」は音楽団体スルヤによって歌われ、その団体の雑誌に歌詞として載った。なかなか自分の詩を発表する機会がなかった中也の詩が初めて世に出た作品である（中也愛唱の「エレジー」という失恋の歌を蓄音機とレコードで、「朝の歌」を山口市で開催されたスルヤ音楽祭の録音ＣＤで聴く）。

また中也は和訳したヴェルレーヌやランボーの詩にふしをつけて朗読し、バッハのオルガン曲もよく歌った。あるいは百人一首の中の「ひさかたのひかりのどけきはるのひに　しづこころなくはなのちるらん（紀友則）」という一首をチャイコフスキーのピアノ組曲「四季」の中の「舟歌」のメロディーに乗せて歌った。メロディーと和歌の持つ情緒が一緒になり声になって出ていく。西洋も日本も国の枠にとらわれず、好きな音楽と詩を直感的に結びつけ、ときには自分で旋律を作って歌ったりした（「舟歌」の演奏をレコードで聴く）。

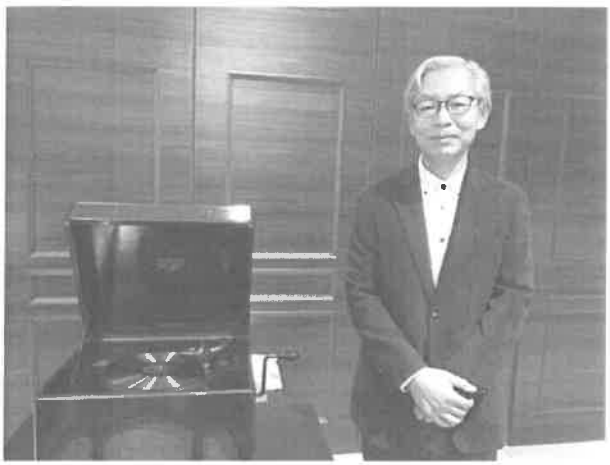
中也にとって「歌」とは何であったか。「詩人は神の感覚において歌う」と書いている。彼は散文の言葉には置き換えられない詩の情緒を歌で表現したのである。自分の深いところから湧き上がってくるものを言葉と音楽で「歌」としたのである。生涯で残したただ二冊の詩集も「山羊の歌」「在りし日の歌」と名付けている。

「ゆあーん　ゆよーん　ゆやゆよん」で有名な「サーカス」という詩も「幾時代かがありまして　茶色い戦争ありました」と七五調を基本として作られている。七五調というリズムは日本人の体に染み込んでいるうえ、サーカスとは切っても切り離せないほど馴染みが深いという日本の背景があり、人々に受け入れられやすいように七五調で作った（きっかけとなった「美しき天然」という明治時代の曲をＣＤで聴く）。しかし本人による朗読では、中也がかつて心酔したダダイズム（既成概念を破壊する）の影響を受け「幾・時代・かが・ありまし・て・茶色い・戦争・ありまし・た」と「・」の部分で少し間をおいて切れ切れに朗読していた。実際のパフォーマンスにおいては七五調ではなかったと聞いて驚いた（実際に聞いていた詩人草野心

平が再現したＣＤを聴く）。

「月の光」という詩は中也が二歳で夭逝した長男の文也を追悼した詩である。中原先生はベートーベンのピアノ曲「月光」を蓄音機でバックに流しながら朗読してくださった。中也の自宅にこの「月光」のレコードが残されていたため、おそらく中也も聴いていたであろうことと、その曲想から先生はこの組み合わせを思いついたとのことであった。ピアノの調べに乗せた静かな朗読を聴いていると、月光に照らされた庭に中也の心が彷徨っているかのような景色が見えるようであった。

約１時間にわたり　ときにＣＤ、ときに古いレコードを中原先生の私物の蓄音機でかけながら、渋いお声での朗読を交えたご講演であった。昭和の初めにタイムスリップしたかのような雰囲気の中、さながら中也の青春の一部を追体験するようであり、ミニレクチャーというにはあまりにも濃い内容で一同感銘を受けた。



中原豊館長と私物の蓄音機

講演後は、吉南医師会の鈴木千衣子先生のご発声による乾杯から懇談会に入り、美味しいお酒とお料理を堪能しながら和気あいあいと会話を楽しんだ。また中原先生を囲んで、中也についてのお話を親しくさせていただいた。参加者からも「中也のお墓が自分の家のお墓の近くにある」とか「中也のお母様に会った」など、地元ならではのエピソードが飛び出し、中原先生も興味深く聞いておられた。

女性医師部会の皆さんはもちろん、日頃なかなか交流のできない吉南医師会の先生方とも仲良くなれて、この会の持つ意味は大きい。今後はさらに参加者が増えるためにはどうすればよいのかを考えていきたいと思う。

次回はぜひ男性医師の皆様も怖がらずにご参加くださいませ。

今年も女性医師部会をよろしくお願いいたします